

女優川上貞奴物語 さだやうこ

火と虹の風景

宗谷 真爾



ほ川上貞奴物語
さだやうこ

父と虹の風景

宗谷 真爾



宗谷真爾（そうや・しんじ）

1925年、野田市に生れる。慶大卒、小児科医、
日本文芸家協会会員。

学生時代より北杜夫らと「文芸首都」同人になり、郷里で「野田文学」を一時主宰。のち第三次「批評」同人となり三島由紀夫らを知る。郷土の農民を描いた『なっごぶし』により第七回日本農民文学賞、SF的な幻想小説『嵐浄土』により第八回中公新人賞を受賞。

著書に、評論『アンコール史跡考』『影の美学』学』『エロスと涅槃』ほか。小説では『王朝妖狐譚』『虐殺された神』『蟻の塔』『照範上人と団十郎』など、多数。

炎と虹の風景—女優川上貞奴物語

1982年8月25日刊

定価1500円

著者——宗 谷 真 爾

発行人——白 石 正 義

発行所——巖 崙（ろん）書 房

千葉県流山市流山1-1306

電話 0471 (58) 0035

印刷——崙 書 房 印 刷

製本——秋 谷 製 本

© Shinji-Sohya

炎と虹の風景

目次

炎と虹の風景——女優川上貞奴物語——

海を渡る鷗たち……	3
怒濤に踊るあやかし……	9
虹よ、消えるな……	25
人肉質入裁判……	37
霧に煙るロンドン塔……	43
シカゴを行くチンドンヤ……	57
かわいい女……	67
バッキンガム宮殿にて……	84
ドーヴァーの光る海……	87
エッフェル塔よりも高し……	98
青年ピカソの光芒……	104

青い目のなかの炎……………113

虹のかけはしを……………119

パリジェンヌの溜息……………123

身を焼く愛の炎……………126

神戸埠頭の涙……………133

ギリシャのタナグラ人形……………139

金剛山貞照寺……………143

川上貞奴略年譜……………149

娘軽業成田開帳……………155

あとがき……………209

炎と虹の風景

—— 女優川上貞奴物語 ——

海を渡る鷗たち

空はくまなく晴れ、波はしずかだった。群れをはなれた鷗が翼をひろげて船首をよぎる。貞奴は、先刻から鷗のすがたを追っていた。一羽だけかと思うともう一羽、どこからともなく現われて翼をそろえた。二羽の鷗は、いま船が通ってきた大海にむかつて飛んでいった。ふたつのくろい点になるまで、じっとみつめる。

貞奴は夫の音二郎とともに故国をはなれ、アメリカ大陸を転々とし、やがて大西洋を横断し、いまイギリスへちかづきつつあった。そんなおのれたちの運命を、二羽の鷗のすがたに無意識にかさねあわせていたのだ。

川上一座を乗せたユーヴェニア号がニューヨークをあとにしたのは、すでに十一日前のことだった。いま船は、スコットランドとアイルランドのはざま、ノース海峡へさしかかっている。

「お貞さん——」

エンジンの音にかき消されて、彼女はその声に気づかなかった。

「お貞さん——」

ようやくふりかえる。音二郎が、いつのまにかうしろに立っていた。いたわるような夫の眼差を見たとき、突然貞奴はもたれるようにして音二郎の胸に顔をうずめた。

音二郎は戸まどいをかんじた。人前で、そんなしぐさを見せたことのない男まさりの勝気な貞奴が、甲板の上で夫に抱擁を求めてきたのだ。どきまぎして思わずあたりを見まわしたのは、むしろ音二郎のほうだった。しかし、そこに何人かの外人客はいたが、日本人のすがたはひとりもなかった。

吐息した音二郎が、そつと妻を胸からはなそうとした。が貞奴は、夫の背にまわした手にいっそう力をこめ、はなれようとはしなかった。

夫は妻の白いおもてを見た。その目はつむられていたが、熱い涙が溢れ、頬を伝わっている。なにかを言おうとした夫は、胸につかえたことばを吞みくだしながら、妻の肩をそつと、そしてじよじよに強く抱きしめていった。

アメリカ各地を巡業しながら、アメリカ人がどこでも、人の見ている前でキスをしたり、抱擁したりしているのを、奇異な思いで受けとめてきた。日本人にはできないことだ——と音二郎は思った。われわれには縁のない習慣だとも考えた。劇でさえそうだった。いまとなつては羞恥の思いを禁じえないが、ワシントンにおいて大統領マッキンレーの前で演説したことばを思いだす。へ貴国へきて狂言の筋を見るに男女あい擁して接吻をするたぐいの幕切れが多い。——貴国の劇は心外に耐えぬ

音二郎は、そのとき切った勇ましい啖呵を脳裡に泛べながら妻の肩を抱いていた。これでいい

のかもしれないと思い、妻のおもてを見る。髪油の匂いがあまく鼻をついた。妻の口がかすかにひらいて、舌先が白い齒のあいだからのぞいていた。音二郎は息をつめて、しずかにおのれの唇を保持ていこうとした。

そのとき、貞奴は音二郎の胸からはなれていた。

彼女はむこうむきになり、ハンカチーフを出して、夫に気づかれぬようにそつと涙をふいた。

二羽の鷗を見たあのときから、なぜか夫にあまえなくなっていたのだった。だが、口にだして言うことはできなかった。

貞奴はふりかえり、笑みを浮かべながら啞然とした面持で棒立ちになっている夫を見た。

「バカねえ、おどろいた？」

「うん」

江戸っ子気質のおきんな妻の、涙に濡れたおもぎしをみつめながら、心のなかでつぶやいていた。

「お貞さん、あんたも女だなあ——」

「もうすぐ、リバプールへつくだろう」

音二郎が言った。

「ヨーロッパで、おれたちの今後の運命がきまる。がんばろうね」

貞奴がうなずく。つねに大きな望みを抱き、どんな苦境にあっても不死身で、力強く挑戦しつづける音二郎を彼女はたのしく見あげた。

葭町で芸者に出ていたころ、伊藤博文に目をかけてもらった。そしてそのつぎに、恋心をいだいた相手は岩崎桃介だった。明治の元勳伊藤公爵は、さすがにスケールの大きい巨人だった。だが、当時まだ慶応義塾の書生だった桃介も、やがて日本の経済界を手中に握ろうとする野心に燃えていた。そんな桃介を奴は（浜田家から奴の名で出ていた）はげしく愛した。彼女の初恋だった。が、やがて桃介は、塾頭の福沢諭吉に見こまれて婿入りし、失恋したのだった。

その後、歌舞伎の中村福助（のち、五代目中村歌右衛門）との仲が評判になった。だが、ふとしたことから知りあつた川上音二郎を、奴はおのれの夫にえらんだのだ。

音二郎は自由民権運動に加わつて投獄されること二十数回、さらにオッペケペー節で世相を風刺し、書生芝居を創始するなど巷をさわがせていたが、そんな得体のしれぬ川上を貞奴は生涯の伴侶にえらんだ。葭町随一の売れっ子だった彼女は、惜しげもなく紅灯の巷を去る決心をしたのだった。たしかに福助は、満天下の人気をあつめるだけのことはあつて美貌の名女形おやまだった。それだけに、貞奴としては不満だったのだ。男らしい男、たとい失敗しても冒険に生涯を賭ける男のほうが好きだった。音二郎を知るにおよんで、彼女は福助からはなれていった。ちなみに、彼女の本名は貞きさ、女優としての貞奴は、芸妓時代の源氏名を結びつけたものである。

船がリバプールへついたのは、一九〇〇年（明治三十三年）五月八日のことだった。

リバプールはマーシー川の北岸にひらけ、イギリス第二の港を持つ都市だった。そこから、めざすロンドンまで約二百マイル。



川上一座十三名は汽車に乗り、しばし田園風景を眺めながら、遠くはなれた故国に思いをはせていた。ロンドン到着は、四時間後の予定だった。

「これが大英帝国か——」
一座のなかの山本嘉一が言った。

かれらはいま、はじめてヨーロッパの土に足をふみいれ、大英帝国を走っていることに身内がひきしまるような感慨をおぼえていた。かならずやりとげてみせる。音二郎は不屈の精神を持っていた。この小柄な男のどこに激しい炎が燃えて

いるのだろうか、と貞奴は、夫のきびしい眼差を見ながら、考えつづけていた。

アメリカでは苦難の連続だった。日本を出帆するときは十九人もいたのに、丸山藏人が二十二歳で病死し、三上繁も化粧品の鉛毒に脳を冒されて死んだ。二十八歳だった。そのほか川本末次は某商館につとめ、渡辺都一の出奔などがあつて、英国の土を踏んだときは十三人にへつていた。音二郎自身もボストンで虫垂炎の手術をした。

だが音二郎はくじけなかった。なにがなんでもやりとおすという鉄の意志があつた。そんな決意をいっそう燃えたさせたのは、日本の新聞だった。その新聞を音二郎はアメリカで読んだのだが、記事はかえつて彼特有の負けじ魂をふるいたさせた。

「——音二郎はヨーロッパへ行くということだが、ヨーロッパよりも日本のほうがはるかにちかしい。また、博覧会へ行くなどと広言しているそうだが狂気の沙汰だ」

「畜生め！」

口に出して読んだ音二郎の声と、貞奴の怒りの声が期せずしてひとつになった。小さなヨットで東京から神戸へいったときもそうだった。世間の嘲笑などもとせずにやりとげた。こんどもかならず——とふたりは思った。

気笛を鳴らしながら汽車は走っていた。羊の群れが青草をはんでいる。馬がかなたの丘の上で疾駆していた。鉄路のちかくに雉子が遊んでいた。おもての景色に氣をとられていたら、白い煙が車窓から流れこんできた。

バーミンガムをすぎるころから一雨やってきた。窓をとぎしているうちに、やがて雨もあがり、

はるかかなたの山の端に、淡い虹が天空にかかるのを見た。

いつかも、こんなきれいな虹を見たことがあった。あれは、——そうだ。夫とともにたかだか十四フィートのヨットに乗って太平洋横断を企てたときのことだった。志州島羽沖で激しい風雨にさらされて——。

一昨年のことだった。音二郎は衆議院に立候補し、みごと落選したのである。得票数は四十六票。川上座を抵当に入れたほか、そちこちから多額の借金をした。

『万朝報』は、そんな川上を痛烈に罵倒していた。「河原者の分際で——」と記事に書いてあった。またある新聞は「書生役者が議會へ出るのは、職場の神聖を汚すもの」と記していた。落選による失意、世評に対する怒りと発憤が、かれらに日本脱出を決意させたのである。

怒濤に踊るあやかし

ふたりは無謀にも、小船に乗って大海を渡ろうとした。ある大学が使っていたヨットを払いさげてもらったのだ。小さな帆と櫂がついていた。ペンキで再塗装して日本丸と名づけた。そんな小船でアメリカへなどいけるはずがない、と貞奴は思った。だが、音二郎は真剣な表情で妻に語

った。

「河原乞食とあざわらうやつを、——そんなこの国の時代遅れの者どもを、おれは見返してやりたい。それだけではない。腐敗しきった劇界を、おれはただすのだ。チリメンの長襦袢をペロペロとひきずり、猿まわしのようにピョコピョコと頭ばかりさげている幫間的な役者をめざめさせるため、おれは泰西の劇を研究して社会の元気を鼓舞させる。——それがわがはいの目的だ」

壮士の身ぶりと言調で、拳をあげて畳をたたいた。

「自由の天地めざして、おれはいく。だが、女のおまえには無理だ。せつかくこうしておまえといつしよになったというのに、許してくれ。おれのわがまを——」

貞奴は夫の顔をじつとみつめた。いったいこの人は、ほんとうにあのちっぽけな船で、太平洋を渡れると考えているのだろうか。だが、夫のおもてには怒りと、そしてはかりしれぬ野望と決意が、炎のように燃えている。

「河原者がなぜわるい。——なあ、お貞」

妻は、かたく結んでいた唇をひらいた。

「あたしもいきます」

あのちっぽけな船で太平洋に挑戦するというなら、それもいいではないか。あるいは衆議院落選の腹いせかもしれないが、たといそうだったとしても、それもいいではないか。よしんばそれが最悪の事態を招いて、夫とともに大海原の藻屑に化すようなことがあっても、妻として本望だ。そうだ、いまこそ不動明王の掌に、おのれの命運をゆだねよう——と思った。

「え？」

音二郎はおのれの耳を疑うように、妻をまじまじと見た。

「あたしもついていきます」

「正気か、お貞、——おまえには無理だ」

「むりではありません。——いいえ、むりでもかまいません」

「万一、おれが海で死ぬようなことがあったら、桃介に、——いや、福沢桃介さんにおまえを拾ってもらおうと考えていた。あの人は結婚に失敗したようだ」

貞奴は下うつむいていたが、きつとおもてをあげて言った。

「あたしはあなたを見そこないました。そんな気持で、こんどのことを考えていたんですか」

「——」

「あなたは負け犬のように、この国から逃亡しようと考えたの？　口では立派なことを言っても、本音はそんなことだったの？　——情ない。たかが選挙に落ち、わずかな借金をしたぐらいで、

へボ新聞に河原者とあざけられたぐらいで、あなたは逃亡して死のうと——」

最後ことばに音二郎は、はっとしたように蒼ざめたおもてをあげた。

「このあたしまですて——」

貞奴は泣いた。音二郎が、この勝気な女の目に涙を見たのは、おそらくこのときが始めてのことだったろう。

彼女は立ちあがった。そして、音二郎をその場へ残したまま出ていこうとしていた。